

2020年度
“届けよう、服のチカラ”プロジェクト
フォトレポート



株式会社 ユニクロ / 株式会社 ジーユー

2020年度“届けよう、服のチカラ”プロジェクト
に参加いただき、ありがとうございました！

みなさんが回収した服は、
国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の
要請と協力に基づいて、服を必要としている
難民・避難民の子どもたちにお送りしています。

このレポートでは、みなさんが回収した服が、
発送後どのようにして子どもたちのもとへ
届いているか、写真でご報告します。



みなさんが学校から送ってくれた服は、まず日本にある倉庫に運ばれます。
受け取る人の気持ちを考えて、まだ着られる服、
もう着られない服に分けられます。



着られる服は畳んで、サイズや性別など、
種類ごとに段ボールに入れていきます。



服の入った段ボールをさらにビニールでしっかり包み、難民・避難民に届けられるまで、雨にぬれたり途中で汚れたりしないようにしています。そして、船に積んで服を本当に必要としている世界中の人々へ届けられます。



マラウイ



ファーストリテイリングの従業員がアフリカ南東部に位置するマラウイに訪問し、服を届けました。日本から片道およそ30時間、遠く離れた
“The warm heart of Africa (アフリカの温かい心)”
の愛称を持つマラウイの様子をレポートします。



設立されてから25年以上にもなるザレカ難民キャンプ。約4万5千人以上の難民が暮らしています。コンゴ民主共和国の出身が60%を占め、次いでブルンジ、ルワンダ、ソマリアと続いています。公共施設やインフラは十分に整備されていません。



女性や子どもが多く、特に子どもの成長に合わせてすぐに必要になるはずの服は1着しか手元がない人もいるなか、届ける服は新たな服と出合える貴重な機会になっています。



日本から送られた服はこちらの倉庫で保管されています。

今回、マラウイに送られたのは1,340ボール、およそ25万着の衣類です。
毎日気温や気候を計測し、保管している物資がダメージを受けないように、
UNHCRによって適切に管理されています。



衣料配布を待つて列に並んでいる難民の人たちです。
どんな服がもらえるか楽しみに待っています。



今回の配布は、1人あたりトップス4枚、ボトムス1枚の計5着です。平等に配るための服を種類ごとに分ける作業はとても大切ですが、大変です。



家族全員分を受け取ると、両手に抱えてもあふれる量です。
服を受け取ってみんなの表情が明るくなりました。



コンゴ民主共和国出身、18歳の青年。
母国で両親が殺されてしまい兄と一緒に逃げてきましたが、
途中ではぐれてしまい一人でキャンプに到着しました。
このように難民の方の境遇は100人いたら100通りあり、人それぞれです。



コンゴ民主共和国出身、33歳の女性。母国で夫を殺され、残った子ども4人とザレカ難民キャンプに逃げてきたそうです。服を受け取った人たちの表情から、服には「着る喜び・楽しみ」といったチカラがあると感じました。



みなさんが集めてくれた服1枚1枚が世界中の子どもたちに
“服のチカラ”を届けることにつながっています。



「子どもが学校に通えて嬉しい。英語を勉強して仕事ができるようになってほしい」と話してくれたのは4人の子どもを持つ女性です。

夫と、家族全員で歩いてザレカ難民キャンプに到着したそうです。渡したシャツと腰に巻いた、アフリカ独自の布であるキテンゲ（Kitenges）がとても合っています。



みなさんの活動によって集まった服と温かい気持ちは、海を越えて、たくさんの人々を笑顔にしてくれています。



はじめは緊張した表情でも、服を渡すとうれしそうにポーズをとってくれたり、従業員が手渡した服が自分の娘のものだと伝えると、「なら私たちはファミリーね！」と一緒に喜んでくれたり。現地で出会った服にまつわるこうしたエピソードも、“服のチカラ”と共に、今後も届け続けていきたいと思えます。



服を受け取った子どもたちやその家族から、
たくさんの「ありがとう」をいただきました！

命を守る。おしゃれを楽しむ。
学校に行く機会になる。人が人らしく生きる・・・。
そんなたくさんの方の“服のチカラ”を、
今年も難民・避難民の子どもたちにも届けることができました。

これからもこの経験を活かし、誰かのために、社会のために
自分にできることを続けていきたいと思います。

プロジェクトに参加していただいたみなさん、
本当にありがとうございました！